

(第46回：2023年4月)

### 家のはなし（海外の住宅事情）～その1～

先日まで満開だった桜の花びらも散って葉桜が目立ち始め、桜前線はさらに北上を続けていますが、首都圏ではこれから新緑が眩しい季節です。4月といえば、サラリーマンの転勤、学生の就職、高校生の進学などで人々が新たなステージに進む時期、多くの人がこれまで住んでいた街を離れて新天地での生活を始めていることでしょう。住む街が変われば、引っ越しという大作業を経なければなりません。季節は春、住む街や住宅が変われば新たな気持ちにもなります。そうした方々には是非とも充実した新生活のスタートを切っていただければと思います。

引っ越しといえば、何年か前にどこかの週刊誌で「家の履歴書」と題する著名人の住宅遍歴にまつわるシリーズ物のコラムが掲載されていました。筆者も、日本と海外の勤務を繰り返す度に住む家が何回も変わりました。引っ越し作業や見知らぬ土地での新生活への順応など、それなりの苦労もありましたが、その一方で家が変わる都度新鮮な気持ちにもなりました。ということで、今月は引っ越しシーズンにちなんで筆者も「家の履歴書」について海外の住居を中心に綴ってみたいと思います。

#### 外務省の独身寮

外務省に入省したのを機に、それまで住んでいた木造の学生アパートから職場の独身寮に引っ越し、イスラエルに赴任するまでの2年少々を過ごしました。寮の場所は、地下鉄丸ノ内線の支線の終点方南町駅からほど近い中野区弥生町、神田川沿いであって川を挟んで向かい側に地下鉄の操車場がありました。建物は鉄筋4階建て、2階のフロアが女子専用、それ以外のフロアは男子部屋となっており、部屋は各フロアに20室ほど。和室4.5畳の部屋が大半でしたが、6畳の部屋も5～6室ほどありました。各フロアには共用のキッチン、トイレが、1階に風呂場が設置されている構造のビルで、1階ロビーには簡単なソファーセットがあり、入り口付近に居住者全員で共有の公衆電話が1台設置され、その奥に管理人家族が居住していました。入居したのは、4.5畳の部屋で布団を敷いたらそれ以外は何も置けないような狭さでしたが、その当時の配属先は現在の

ような働き方改革による職場環境とは程遠い残業漬けの日々、帰宅は毎晩終電近い時間で部屋は寝るだけの場所といった趣でしたので、部屋の狭さはあまり気になりませんでした。それよりも、深夜帰宅組としては24時間いつでもシャワーを浴びることができ助かりました。今でこそ、職場の独身寮といえばバスルームやキッチン付きのワンルームマンションのタイプが標準のようですが、40年以上前の独身寮はどこもこんなもの。この寮は、老朽化して取り壊され、今は別の施設になっているようです。

## イスラエル

このウサギ小屋のような生活は、イスラエルに赴任して一変します。着任して1か月ほど後、イスラエル国内で唯一の英字新聞を頼りに Classified に掲載されていた賃貸広告の中から探し出したのは、テルアビブ大学から徒歩で数分の住宅街に立地の物件。3ベッドルームとリビングダイニングキッチンのある120~130㎡の広さの家具付きアパートで、日本式に言えば3LDKの造り、8階建てビルの3階にありました。3階といっても、現地では地上階は Ground Floor で2階から上の階を数字で呼んでいましたので、日本式には4階ということになります。日本では鉄筋コンクリート造りの集合住宅はマンションというカテゴリーですが、イスラエルでは英国式に“Flat”と呼ばれていました。蛇足ですが、北米では日本のマンションに相当する鉄筋コンクリート造りの普通の集合住宅は“Apartment (アパート) ”、高級分譲住宅は Apartment と区別して“Condominium”と呼ばれています。

イスラエルは、4月中旬から10月中旬までは気温が25℃以上と夏が長いことから、戸建て住居も集合住宅も多くが夏向きにできており、全ての部屋は開口部が大きく風通しを重視した造りです。入居したアパートは、リビングとテラス（広めのベランダ）との仕切りには広い掃き出し窓があり、床は寝室からキッチンまで全面大理石が敷き詰められていました。家具は、リビングダイニングにソファーセットと8人掛けのダイニングテーブルセットが備え付けられ、キッチンにも6人で食事のできるテーブルセット、キッチンの棚には食器も備え付けられていました。テレビ、ステレオ、冷蔵庫、洗濯機等の家電製品も完備、メインのベッドルームにはクイーンサイズのベッドとワードローブ、クローゼット、残りのベッドルームにもベッドや机、本棚などが備え付けられており、リネンも揃っていましたので、自分で用意しなければならないものは何もなく、入居当日から日常生活を始められました。アパートのオーナーは、オーストラリアのシドニー在住のユダヤ人。親日家の方で、好意によりこのグレードのアパートとしては400ドルという格安の金額で借りることができました。当時のレートでは日本円にして8万数千円で、家賃補助がありましたので自己負担は100ドルほどだったと記憶しています。とにかく、それまで東京では猫の額ほどの4.5畳住まいでしたから、それとの比較ではまるで大豪邸、あまりの広さに持て余してしまい、メインベッドルーム

を除く2つのベッドルームは2年間ほとんど足を踏み入れず仕舞いでした。

テルアビブは地中海に面する人口百万人規模の商業都市で、温暖な気候の過ごしやすい街です。夏場の最高気温は30℃を上回りますが、中東特有の乾いた空気は湿気を全く感じさせず、夜になれば海風も吹いて気温も下がります。こうした気候だったからでしょうか、個人の住居で冷房設備のあるところはほとんどなく、筆者のアパートにもエアコンは設置されていませんでした。そうはいつても、7月から8月にかけての数週間は気温が35℃を超えることもあり、この時期はエアコンなしで暑さを凌ぐのが大変でした。また、4月ごろの数日間にハムシーンと呼ばれる砂嵐（サハラ砂漠の砂が南風によってエジプトからイスラエルまで飛散）の日が続くことがありましたが、ハムシーンの日には熱波で外気温が40℃を超え、強風に乗って砂塵が舞います。一日中窓を締め切りにしていましたが、これが暑いなのなの、その上に窓の隙間から砂ぼこりが入り込んで家の中は砂だらけです。もっとも、嵐が過ぎ去った後には、家具を片付けてバケツに組んだ水で室内の砂をテラスに流して終了という具合で、掃除は簡単でしたが…

また、室内の天井にベージュ色のヤモリが何匹も這っていて、時折ベッドの上に落ちてくることがあり、当初は何とも気持ちが悪かったことも思い出されます。イスラエル人に言わせると家の守り神だからそっとしておいてやれということでしたが…

この家では、空き巣に2度も入られたこともありましたが、とにかく広い空間での生活は解放感があって快適に過ごすことができました。広々としたアパートでの日々に、東京での4.5畳暮らしなどはいつの間にか忘れていました。

## アンカレッジ

アラスカのアンカレッジでは、前任者のアパートを引き継いで半年ほど過ごし、その後引っ越して別のアパートに移りましたが、いずれも木造3階建の集合住宅でした（詳細は本コラム第17回を参照ください）。間取りは、どちらも1ベッドルームとリビングダイニングという60㎡ほどのアパートでした。狭い（と感じた）アパートでしたが、北米では珍しく家具付き住居、イスラエルとは逆に冬の寒さ対策が施された住居で、全アパート集中暖房、床全体が毛足の長い絨毯を敷き詰められており、窓は開口部が小さく密閉性の高いアパートでした。また、白夜の季節の安眠に配慮して遮光カーテンが備え付けてありました。重宝した珍しい装備としては、「セントラルクリーナ」と呼ばれる建物全室で使用可能な集中掃除機が備え付けられていたことです。これは、建物の地下室に大型の掃除機本体が設置され、掃除機からすべてのアパートの各部屋の壁面まで吸引用配管が設置されているものです。各アパートの住人は壁面の掃除機ホース取り付け口のカバーを開けてホースを取り付ければ、地下の掃除機本体が自動的に作動するという仕組みです。壁に6~7mの長さの掃除機ホースを取り付けるだけで掃除ができるので非常に便利でした。個人で掃除機を購入する必要はなかったわけですが、こんな装

置は今に至るまでアンカレッジのアパート以外では見たことがありません。

イスラエルのアパートと比較すると約半分という狭さでしたが、維持管理のことを考えると1人暮らしにはこれくらいの広さが適当だったかもしれません。ただ、木造のアパートは防音性が低く、上階の住人が廊下や階段を歩き回る足音は気になりましたが…

## モントリオール

カナダのモントリオールで住んだアパートは3か所。新聞の Classified 欄で見つけた1軒目のアパートに入居したのは、着任から1週間後と異例のスピード決断でした。部屋は1ベッドルームとリビングダイニング、キッチンという間取りのコンパクトサイズ。この部屋については、第25回のコラムにも書きましたので詳細は割愛しますが、北米の大都市でよく見かける賃貸専門の20階建てアパート・ビルでの生活は大変快適でした。ただ、初めて家具なしの住居に住むことになりましたので、家具の調達には散財することになってしまいました…

2軒目の住居は、モントリオール市街地から車で5~6分ほどのセントローレンス川の左岸、モントリオール本島に近接した小さな島にあったコンドミニアムで、La Pyramide という名称のとおりピラミッド形状の8階建てビルでした。住居を移転したのは、それまで居住していたアパートの家賃値上げがあったためで、契約更新時期に20%もの値上げ通告があり、やむなく引っ越したものです。当時、市内の賃貸アパートは売り手市場でやたらと値上げが行われていました。本当は、家具の移動が面倒でしたので引っ越しはしたくなかったのですが…

ピラミッド・ビルが建つ島は英語で Nun's Island、フランス語で île-des-Sœurs と呼ばれており、島名はかつて修道院が所有権を持ち修道女たちが生活していたことに由来しています。当時、修道院は既に別の場所に移転しており、島は開発が進み、いくつものアパート・ビルが並んでいました。緑豊かな島で、中央には18ホールのゴルフのショートコースと打ち放し練習場、アウトドアとインドアのテニスコートそれぞれ10面ほどあり、それまで住んでいた市街地の喧騒とは打って変わって静かな住環境でした。

コンドミニアムのオーナーはイタリア系カナダ人、投資のために購入した物件だそう、ビルの1階にあった部屋は1ベッドルームと広めのリビングダイニングとキッチン、バスルームとは別にゲスト用トイレのある間取りで床面積は80㎡。十分すぎるスペースでしたが、家具が少ない分室内が殺風景に見えてしまい、思わずソファーセットを買い足したほどでした。部屋の設備ではキッチンが充実していたのが印象的で、大型の冷蔵庫と食洗器、シンクのディスポーザー、大容量の食器収納など便利な設備満載、40年以上前にもかかわらず、現在の日本の新築マンションと比較しても全く遜色ないかそれ以上のものだったという印象です。また、壁の隅から隅まで部屋全体に敷き詰められた毛足の長い絨毯は、入居までに全面的に洗浄が行われてほのかな洗剤の残り香も

あって清潔感があり、さすがコンドミニアムと称しているだけあるなと思っていました。建物自体も、エントランスにはドアマンが配置され、日中はフロントに管理人が常駐、地下に駐車場と各住居のトランクルーム、上層階にはトレーニングジム、ラウンジがあり、屋外には25メートルのプールがあるなど、共用の施設も充実していました。

このコンドミニアムに居住したのは、モンリオール在勤2年目の頃でしたが、ゴルフやテニスに熱中していた時期とも重なり、夏はほぼ毎日打ち放しに通い、冬の週末は専らテニス三昧で過ごしました。

住居は1年契約でしたが、ここも移転を余儀なくされてしまいました。2年目の契約更新時期に、オーナーからの通告で、自分の息子が住むことになったため、契約更新はできないとのこと。ここが、日本と海外の賃貸不動産における商慣習の違いで、海外の賃貸契約の更新は貸主が望まなければそれで終了、借主の居住継続の意志は考慮されません。仕方なく次の住居探しを始めましたが、その頃は不動産市況が高騰していた時期。手ごろな物件がなかなか見つからず、1年前に住んでいたアパートにも当たってみたものの希望の間取りの部屋は満室で、何とか見つかった物件は、市内中心部にあった貸アパート専用の30階建て高層ビルの28階、50㎡ほどの1ベッドルームタイプの部屋でした。結局、この部屋には離任までの2年半近く住み続けましたが、29年間の海外生活の中でも最も狭小な住居でした。2軒目の住居では広いスペースを埋めるために家具を買い足したのですが、3軒目では逆に家具の置き場がなかったため、止むなく一部の家具を処分する羽目になるという無駄なことをしました。引っ越し貧乏というやつです。つくづく金の遣い方が下手だったと反省したことを思い出します。

狭い部屋でしたが、入居したアパート・ビルはモンロワイヤル公園に近接した大通りの交差点それぞれの角に建つ4棟のビルの1棟。これらのビルは、地下で繋がった複合ビル（いわゆるコンプレックス・ビル）を構成し、うち1棟がビジネスホテルで残り3棟は賃貸専門アパート、地下2階に駐車場、地下1階に大型スーパー、グローサリーストア、リカーストア、青果、食肉などの専門店、レストラン、スポーツジム、映画館などの商業施設が併設されており、極寒の週末などはビルの外に1歩も出ることなく過ごすことができました。部屋の狭さを割り引いてもまあまあ快適な住居でした。

モンリオールから帰国後、3度の引っ越しをしました。今となっては転居の動機もはっきりとは覚えていませんが、東京の狭い住居に飽き足らなかったのは確かです。冷静になってみれば、公務員の給与で払える家賃で海外と同じような空間を東京で求めるのは土台無理な話ですが、きっと頭の切り替えができていなかったのでしょう。

結婚後は、千葉県柏市にあった3DKの国家公務員住宅に転居。その後、初めて家族帯同で海外に赴任したのはそれから2年後のことでした。

つづく

(公財) 栃木県国際交流協会 参与 石塚勇人 (略歴)

1977年外務省入省。外務本省では主に経済協力局、国際協力局で途上国の開発協力を担当。海外勤務歴は、在イスラエル大使館に始まり、在アンカレッジ総領事館、在モントリオール総領事館、在連合王国(英国)大使館、在南アフリカ大使館、在ギリシャ大使館、在ドイツ大使館、在インド大使館、在ニューヨーク総領事館の9公館で計29年間。ギリシャ、ドイツ、インドの各大使館で領事班長を歴任。在ニューヨーク総領事館領事部長を最後に2019年3月退官。同年5月より現職。